

温故知新 昭和40年台に学ぶ【家族編】

昭和40年代、家族そしてそれを取りまく近所。当時のコミュニティを知ることができる貴重な思い出がぎっしり

地域・きずな・思いやり 大切にしたい人間関係



杉並第六小学校 昭和46年の空撮(提供: 杉並第六小学校)



杉並第六小学校・昭和45年の花壇(提供: 杉並第六小学校)

阿佐谷南1丁目に住んでいました。昭和40年に息子が9歳、娘が6歳です。我が家も含め、近所はほとんどサラリーマンの世帯でした。当時はまだ夫婦共働きが少なく、主婦は家事に専念していたものです。私は主婦業の傍ら、地域の子ども達のことをよく見て声をかけたりしていましたが、杉並第六小学校のPTA会長に選ばれてから、私の本格的な地域活動人生が始まりました。その後、民生委員、諸々の協議会、杉並区町会連合会、馬橋青少年育成委員会・・・と途切れる事無く、なんと活動は80歳まで続いたのです。最近では特に子育てへの地域協力者の必要性が叫ばれていますが、今思えばその先駆けでした。

数多い活動の中で印象に残っているのは、昭和40年代に始まった杉並第六小学校校庭での菜園作りに関わり、そばを育てたこ

とです。子ども達にそば粉ができるまでを見せたくて、馬橋村時代の石臼を借りてきて挽きました。量は少なかったのですが、こねたものをフルーツポンチに入れて食べましたが、子ども達から感謝の短冊を贈られ感激しました。子ども達の喜ぶ顔を見てますます張り切り忙しくなりました。それでも、自分の子ども達にはちゃんと顔を見て「ただいま」「おかえりなさい」の声かけをすることや、食事作りは精一杯手をかけ、心を込めることを忘れませんでした。

子どもは親の背中を見て育つというのが私の方針です。子ども達も「お母さんは人のために一生懸命働いているから」と、どんどん協力的になって行きました。

地域活動でも家族でも、大切なのはきずなと思ひやりですね。

投稿：石川慶子

(昭和40年代・当時31歳～40歳)

—掲載日・2011年10月13日—

今も記憶にこだまする威勢のいい音 銭湯の思い出



千代の湯(昭和40年代より後のもの)と脱衣用籐籠。(提供: 松崎工務店)

子どもの頃、杉並に引っ越してきて以来、今でもずっと梅里2丁目に住んでいます。昭和40年代と言えば、世の中がものすごい勢いで変化した印象がありますが、一般の暮らしは徐々に移り変わって行きました。

当時はまだ内風呂のない家が多く、銭湯を利用するのがごく普通のことでした。私も昭和43年と47年に生まれた二人の子どもを連れて通ったものです。

当時近所には「千代の湯」と「馬橋湯」がありました。他にも杉並には銭湯が多かったの

でいろいろ行ってみました。どこもだいたい同じようなしつらえでした。

銭湯に欠かせなかった今は懐かしい物と言えば、番台・籐製の脱衣籠・ロッカー・大型の鏡・大型の柱時計・大型の体重計・身長測定器・映画のポスター・コーヒー牛乳・小さな庭と池・・・思い出すと当時の様子が蘇ってきます。

昔の銭湯には、背中を流してくれる「三助さん(銭湯で風呂を炊いたり浴客の体を洗ったりする男性)」や、赤ちゃんの世話をしてくれるおばさんなど、いろいろな仕事をする人がいました。三助さんが浴客の背中を洗い終わると手のひらを少し丸めてポンポンと威勢よく叩くのが面白い習慣で、その音が風呂場の高い天井に響くのが心地良い雰囲気でした。

見ず知らずの人も子ども達には親しく話しかけてくれたり、混雑する洗い場でも暗黙のマナーでゆずりあったり、風呂というのは人の良いところが素直に出る場所なのかも知れません。

投稿：小峯重信

(昭和40年代・26～35歳)

—掲載日・2011年9月30日—

「阿佐谷でがんばって行こう」 ご近所同士の助け合い

石川県の同郷の主人とは一度の見合いで杉並で式を挙げました。昭和37年、場所は阿佐谷北2丁目です。私は農家の大家族出身で、子どもの頃から農作業の手伝いや家事、弟妹の世話等していました。母に何を手伝えれば良いかとばかり考えていた時代が続きました。それが、結婚して当時出回り始めた洗濯機や冷蔵庫を揃えてみると、「こんなに楽で良いのかしら」と思うほど便利な暮らしになってとまどいました。

家の周りにあらゆるお店があり、各お店の方々にも地方出身の人が多くいたので、お互いに助け合って東京の阿佐谷でがんばって行こうという雰囲気がありました。平素でもいろいろな地方の帰省土産が集まったりして

温故知新 昭和40年台に学ぶ【家族編】

郷土色を楽しんだものです。

昭和39年に長女、43年に長男が生まれ、今度は子育てが忙しくなりました。

お店屋さんが多いご近所同士、よその子どもにも目を配っていました。わんぱくな子ども達にハラハラさせられることも多かったので、何よりも子ども達がかわいくてかわいくて。街のみんなで子育てしました。

中央線が高架になって、阿佐ヶ谷駅の「開かずの門」と呼ばれていた踏切も無くなりました。下水道ができ、トイレも水洗になりました。阿佐谷の街はどんどん変わり、近所のお店も減りました。

今でも変わらないのはご近所付き合い。阿佐谷に来てから時々故郷が恋しくなることもありましたが、どんな時も楽しく過ごして来られたのは子ども達の笑顔とご近所の助け合いがあったからだと思います。



通りで遊ぶ子ども達

投稿：岡崎洋子

(昭和37～49年頃・当時22～35歳)

—掲載日・2011年9月15日—

活気と景気と和気あいあい

昭和33年、阿佐谷パールセンターに先代が<和菓子・栄太楼>を構えて以来、いろんな時代を経てきました。ここは昔から、中央線沿線では最もにぎやかな商店街という印象でした。

昭和40年代。活気がありましたねえ。七夕など、それはそれは盛り上がりました。短冊を飾る良い竹がなかなか手に入らなくて、田無(現・西東京市)の知り合いに頼んで採らせてもらったり、準備も大変でした。店舗を借りている個人商店が多くて、行事でも何でも知

恵を出し合って商売して行こうという連帯感がありました。

ありとあらゆるお店があった並びが、時代と共に変わって行きました。材木屋が電化製品店に変わったり、伝書鳩屋がペットショップになったり、という具合に。しかし建物が近代化して行くに従って、通りの眺めが味気なくなり、商品が並んでいるだけというふうになって行くとなれば残念ですね。

当時私は35歳～44歳で若かったし、とにかくよく働きました。どんどん景気も良くなって行きました。そうそう、商店街の青年部は特に活気があって、海水浴やスキーや山登り等、バスツアーでよく行ったものです。いつも店が忙しくて道具も何も揃えてないんですが、普段着のまま行ったりするのもまた楽しかったですよ。今またそういう親睦ができないか話し合っていますが、プライベートの時間がより大切になっている今、なかなか難しいようです。それもまた時代なんですかね。しかし、私はあの和気あいあいが大好きでした。横のつながりが薄くなって、ちょっと寂しいなあ。



ロングセラー「栗まん」と「茶通」。当時と同じデザインの包装紙

投稿：坂本公英

(昭和40～49年・当時35～44歳)

—掲載日・2011年9月15日—

DATA

取材：区民投稿

撮影：区民投稿

掲載日：2011年09月15日